

木食仏と観音堂

上条で護られた文化財

上条地区の一木百観音像は、上萩原出身の木食戒・木食白道の作としてよく知られています。大振りの子安観音像は他地域でもありますが、光背から像の裏側まで、びっしりと観音様が彫られた様子は圧巻で、白道を代表する作品のひとつです。

この像を安置する観音堂は、組の集会所をかねていますが、これは建築当初からのものと考えられます。

集会所として活用してきたために、

このような小堂でも傷みが少なく、さらに中に安置されている木食仏も、良好な状態を保つことができたのでしよう。



◆木食白道について◆

一木百観音像は、甲州市内の旧家に伝わる記録「萩原木食繁昌」により、天明元年（一七八一）八月に造像されたことがわかっています。

白道は、宝暦五年（一七五五）に、現在の塩山上萩原上原に生まれまじた。七歳のとき父親とともに回国の旅にですが、翌宝暦十二年、八歳のとき旅の途中に立ち寄った伊予の宇和島（愛媛県宇和島市）で父親が病死、その後回国を再開するものの明神村（愛媛県久万高原町）の彦八という人に養われ、明和五年（一七六八）、十四歳まで農業などをして暮らします。

十四歳のとき、かつて二度みた夢を再びみて、湯の宮権現（愛媛県）にたずねたところ、出家して戒行すれば名をなすという神託をうけ、そのまま明神村へは帰らず四国霊場廻りに出立しました。四国には、十七歳までいたと記されています。

◆諸国回国の果て◆

その後の旅はまさに「回国」で、福岡・長崎・鹿児島・山口・広島・香川・岡山・兵庫・和歌山・奈良・大阪・京都・福井・滋賀・岐阜・石川・富山・新潟・長野・群馬・埼玉・静岡・神奈川・千葉・茨城・栃木・福島・宮城・岩手・青森・秋田・山形と二十三歳になるまでの六年間で九州から本州をくまなく巡り、そして安永七年（一七七八）、二十四歳のとき、ついに北海道に至ります。

◆蝦夷の地◆

北海道は、白道にとって運命の地です。木食白道の「木食」とは、木食戒という五穀と塩を絶ち、火を使った調理をせず、草の根や木の実などを主な食料として修行を行う僧侶のことです。白道が木食戒に入ったのは、自伝によれば北海道の大田山（せたな町）

で念仏を唱えていたときの霊験によるもので、さらに仏像の彫刻もこの地で始まりました。

北海道二海郡八雲町の門昌庵には、背面に「南無阿弥陀仏 白道」と墨書された子安観音菩薩像が安置されています。もともと白道の師・行道の作品とみられていましたが、近年調査により白道作と判明しました。

二年間を北海道で過ごし、青森・秋田・山形・福島・栃木・群馬・長野を経て、三年後の天明元年・二十七歳のときに郷里に帰ってきます。



市内に残る「蝦夷国風図画」から。
熊をいけにえとして神様に捧げる仕度をしているところ。

◆郷里の白道◆

—「萩原木食繁昌」より—

天明元年（一七八一）に、法幢院で病気を治すまじないを行ったり、人々の求めに応じて仏像を彫ったりしていましたが、これが評判を呼び近隣から毎日八〇〇人から一〇〇〇人が訪れるようになり、寺の付近には茶見世、水菓子売り、餅、そば、そうめんなどの出店が立ち並び、境内では歌舞伎興行までが催されるほど大変な賑わいだったと「萩原木食繁昌」は伝えています。

の小観音を刻みつけ浄正寺に納め」とあり、上条の百観音像の特徴をよく現しています。

ほかにも上原子安地藏像、福蔵院百体仏、赤尾子安地藏像など、市内に残る大作をこのときに造像したことが知られています。



上・百観音の背面には、大小の観音像がびっしり彫られており、正面とはまた違う迫力があります。

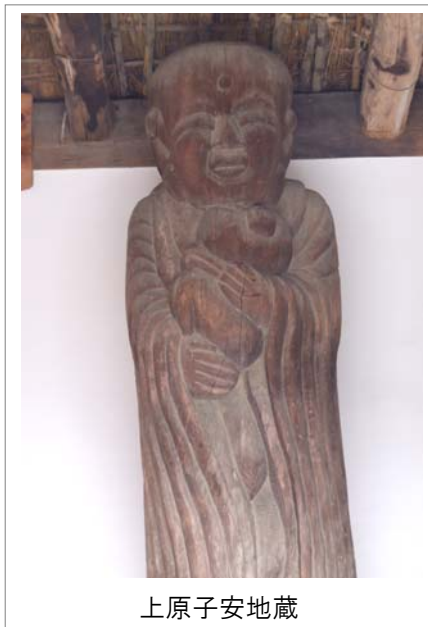
右・背面に納まる石造物は、百観音よりも古い特徴をもち、中世の作品と考えられます。



福蔵院百体仏



赤尾子安地藏



上原子安地藏

今号は木食白道について特集しました。

近年研究が盛んになってきている白道ですが、出身地である神金地域でも、最新の情報はあまり伝わってないと思います。白道の作品を見直す一助となれば幸いです。

また、百観音を安置する観音堂ですが、百観音の制作と同じ十八世紀後半の建築と思われれます。

百観音も観音堂も、二百数十年と上条地区の皆様がご護りしてきた文化財です。後世に、永久に保存されますよう、教育委員会でも努力していきたいと思えます。